

Opinion オピニオン

オープン カレッジ

ありがたいことで、昨年上梓した拙著『アジアのなかの戦国大名―西国の群雄と経営戦略―』（吉川弘文館）に対して、多くの反響があった。学研『歴史群像』のような歴史雑誌が、「日本の枠を越えて活躍する西国大名」のタイトルでインタビュー記事を掲載してくれたのは常套であるが、予想外に反応があったのが経済や外交を扱う各紙誌だ。

日経新聞は、文化欄に「戦国の世に国際派大名あり」の特集を組んで、自領産の硫黄鉱石や銀鉱石を元手に中国、朝鮮、東南アジ

戦国大名のアジア戦略

は、「話題の本」紹介のなかで、戦国時代を「各大名が遣明船を出して明との貿易を競ったのはじめ琉球、朝鮮、東南アジア諸国とのグローバルな貿易が盛んに行われた時代」とした。小学館『SAPIO』は、中国、韓国、ロシア、北朝鮮などに弱腰で不利な局面が続く近年の日本外交を批判して、実は巧みな交渉手腕を発揮した過去の日本外交史を特集したが、拙著を読んだ同誌編集部からの依頼で、「戦国時代にアジアを見据え、カンボジア国王と外交関係まで樹立した大友氏の先見の明」という長いタイトルの文を寄せるはめになった。

日本の戦国時代の歴史はおもしろい。15世紀の応仁

下取りレースの覇者が信長か、秀吉・家康と争ぶ。しかしながら、日本史の古文書や考古史料を分析していると、信長や秀吉が「天下統一」をめざして活動した時期でも、列島各地にはその求心構造のベクトルでは解釈できない史料群があふれていることに気がつく。足利将軍家もつ「日本国王」名義を継承して対明（中国）外交権を独占した周防大内氏。遣明船に九州産硫黄鉱石を満載輸出して莫大な利益を得た薩摩島津氏と豊後大友氏。自領山中での銀鉱脈発見を受けて急ぎ造船と対明輸出をもくろんだ肥後相良氏。シャム（タイ）国王への親書で毎年の定期船就航を求めた肥前松浦氏。対琉球貿易の成就をその航路に位置する島津氏に依頼した越前朝倉氏。そして、1570年代に大友氏が獲得した対カンボジア外交権を競合・奪取した島津氏等々。

忘れられた

国際派大名の先見性

ア・西欧諸国と交易した島津義久、大友義鎮（宗麟）、豊臣秀吉、徳川家康ら諸大名を紹介した。毎日新聞出版『週刊エコノミスト』で



名古屋学院大学
国際文化学部教授

鹿毛 敏夫

かげ としお 日本中世史、対
外交渉史。九州大学大学院人文科
学府博士後期課程修了。博士（文
学）。1963年生まれ。

の乱に始まった争乱のなかから地域に根付いた実力ある支配者が台頭し、やがて16世紀には複数の地方権力の領国が確立する。伊達政宗、北条早雲、上杉謙信、武田信玄、毛利元就ら、独自の強い戦国大名の群雄割拠はおよそ100年続き、やがて織田信長、豊臣秀吉、徳川家康によって中央に統一されていく。中学・高校の授業で、15・16世紀の日本の歴史は群雄割拠から天下統一へ進むと教え、子どもたちは、その天

「群雄割拠から天下統一へ」は16世紀日本の本当の姿なのか？『アジアのなかの戦国大名』では、この日本史の常識に疑問を呈し、華やかな天下取りレースの陰に隠されて注目されることになった、戦国大名たちによる「アジア」を意識した領国為政者としての政治力学の動向と外交貿易政策の特質を描いた。信長・秀吉・家康が成した「天下統一」に二辺倒する歴史観の見直しを、この中部地方から発する意義は大きいようである。